

通信制高校におけるボランティアによる学習支援

土岐玲奈¹⁾ 保坂 亨^{2)*} 滝本信行²⁾

¹⁾東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科・博士課程 ²⁾千葉大学教育学部

The Learning Support by The School Volunteers at The Correspondence High School

TOKI Reina¹⁾ HOSAKA Toru^{2)*} TAKIMOTO Nobuyuki²⁾

¹⁾Doctoral Course The United Graduate School of Education Tokyo Gakugei University Japan

²⁾Faculty of education, Chiba University, Japan

本稿の目的は、学生ボランティアによる通信制高校における学習支援活動の実態と、学生にとっての意義及び課題を明らかにすることである。学生に対する聞き取りおよび参与観察からは、学生が、①学習支援に特化した活動を通し、教えることの難しさを実感していた事、②多様な学習歴を持つ生徒に対し先入観を持たず、アセスメントを行うことの必要性を認識していた事、③生徒が持つ学習に対する劣等感への配慮をしていた事、④成人生徒に対する言動に気を遣っていた事が明らかとなった。学生は、生徒と率直に話をできる「ななめの関係」を持つ本活動を通して、学習に限らず生徒が持つ多様な背景を知り配慮できるようになるとともに、自身の教員としての適性について改めて考えることにもなる。一方、生徒と話をする時間を持ちづらい、学習に対して積極的な生徒以外と関われない、配慮や工夫についての情報を共有できていないという活動の課題も明らかになった。

キーワード：通信制高校 (Correspondence high schools) 学習支援 (Learning support)
学生ボランティア (Student Volunteer) 振り返り (Reflection)
長期欠席 (Long-Term absent student)

I. 問題と目的

1. 通信制高校について

1) 通信制高校における学習

高校には、全日制、定時制と並んで、通信制の課程が設置されている。通信制高校における教育は、添削指導、面接指導及び試験によって行われる。添削指導とは、各学校において作られるレポート課題を、生徒が各自で作成し、それに対して教員が添削、助言などを記入して返却するという指導方法である。一方向指導は、レポート課題作成に関する指導であり、多くの場合、一斉授業の形で行われている。通信制課程においては、添削指導が教育の中核を担っていることから、生徒が登校して面接指導を受けるべき日数は、他の課程の授業時数と比較すると非常に少ない。高等学校学習指導要領第1章「総則」第7款「通信制の課程における教育課程の特例」において定められている主要教科（国語、地理歴史、公民、数学）を例にとると、通信制課程においては、添削指導3回、面接指導は1単位時間（50分）と定められている。つまり、通信制課程に在籍する生徒は、レポート課題を3通こなし、学校で面接指導に1回出席し、定期試験に合格すれば、これらの教科について1単位を修得することが可能ということになる。他の課程と比べれば、生徒が登校すべき日数は圧倒的に少ない。そのため通信制高校には、経済的な理由から他の課程に通うことが難しい者や、仕事をしながら高校教育を受ける者の他、中学校

や、他の高校における不適応を経験した者等が在籍している。生徒の中には、講義型の面接指導のみで学習内容を理解し、レポート課題を完成させることが難しい者も少なくない。しかし、公立高校における教諭等の配置基準は、「公立高等学校の適正配置及び教職員定数の標準等に関する法律」によって定められている。これによると、公立全日制高校では生徒数が1,121人を超える場合でも、生徒21人に1人の割合で教諭等が配置されるのに対し、公立通信制高校では、生徒数が1,201人を超える場合、教諭等は生徒100人に1人の割合で配置されることになる。

そのため、公立の、生徒が月に数日程度登校して面接指導を受け、自習によってレポート課題をこなすという、従来から見られるタイプの通信制高校では、他の課程に比べて圧倒的に少ない人員で、多様な困難や問題を抱えた生徒に対応しなくてはならない状況がある。しかし、教員が担任する生徒数が多く、個々の生徒に対するケアが十分に行なえないケースも多い¹⁾。

通信制高校における学習の継続と卒業の難しさは、課程設置当初から指摘されてきたことであった（文部省、1948など）が、今もって問題解決には至っていない。しかも、現在の通信制高校では、不登校など、学校で授業を受けなかった期間があるという者や、どこかの段階で授業内容の理解が困難になった時、サポートを受けることができなかった者等学習にブランクがあったり、基礎的な学力を身に付けることができなかった者が少なからず在籍している。さらに、こうした状況に対して、学習を含む適切な支援を受けることが難しい家庭環境に育っ

*連絡先著者：保坂 亨

ている場合もある。こうした生徒は、学習意欲や将来に関する展望を持つことが困難であり、様々な支援を必要としている。

2) ボランティアによる学習支援活動

通信制高校における学習支援活動としては、藤田・加藤(2012)が、私立通信制高校において、大学生ボランティアが「授業」に参加し、生徒の学習支援を行った事例を報告している。これに対し、通信制高校におけるボランティアによる個別支援活動に関する調査報告は、筆者の管見の限り見当たらなかった。

2. 本稿の目的

本稿では、調査研究の少なさに鑑み、通信制高校における学生ボランティアによる個別の学習支援の一例として、公立通信制A高校で実施されている「学習チューター」活動を取り上げ、本活動の実態と、ボランティア学生にとっての意義、活動の課題について検討する。

II. 高校および活動の概要

1. 公立通信制A高校の概要

公立通信制A高校は、生徒数約1,500人に対し、非常勤講師を含めた教員数は約50人の、単位制(無学年制)の学校である。生徒の年齢は、10代から80代まで、非常に幅が広い。A高校においては、所定のレポートを全て提出し、C以上の評価を得ることと、スクーリングに定められた回数以上出席すること、定期試験に合格することによって、単位を修得することができる。学習支援については、質問に来た生徒に担任以外も対応ができるよう、情報交換のしやすい大職員室制を採用するといった工夫もなされている。ただし、生徒の中には、学習内容について「何が分からないかわからない」ために、教員に質問する事を躊躇する者もいた。

2. A高校における学習チューター活動の概要

学習チューターは、面接指導が行われている時期の毎週日曜日に学校を訪問し、チューター室において来室した生徒のレポート課題を中心とした学習の支援活動を行っている。利用生徒数は、各回10人前後だが、時期によって大幅な増減があり、レポートの最終提出締め切りである学期末には増える傾向にある。利用者の年齢層は高く、10代の生徒は半数以下である。「学習チューター室」には教員は常駐せず、学習支援活動は基本的に、チューターと生徒の1対1で行われている。

3. A高校における学習チューターの役割

A高校において、学習チューターはどのような役割を担っているのだろうか。通信制高校における学習支援者の役割を考える際には、緒方ら(1994)の、不登校の子どもに対する家庭教師の役割が参考になる。緒方らが指摘した「①学業を教える教育的役割、②同一化モデルとしての心理発達の役割、③カウンセラーとしての心理療法的役割、④家族に変化をもたらす家族療法的役割」という4点のうち、④の家族療法的役割をのぞく3点が、本稿における学習支援者の役割である。これらは本稿の

目的にとって重要であるため、以下、これら3つの役割について詳述する。

まず、①「学業を教える教育的役割」の「学業」という言葉の中には、レポート課題や各種教材を用いた学習指導をはじめとして、辞書の引き方、自宅での学習の進め方に関連するアドバイスなどが含まれる。児童養護施設で活動する学習ボランティアに対するインタビューを実施した大塚(2011)は、ボランティアが学習を介して子どもと関わるのが、何かを学ぶための方法が複数ある事や、情報へのアクセス方法を伝えることになるとする。通信制高校における学習は、元来「自学自習」を基本としていることから、生徒に対し、学習内容のみならず、学習方法を伝えることの重要度が特に高い。また、通信制高校に限らず、学習の方法を学ぶことの重要性は増している。オリヴェリオ(2005)は、常に変化している現代社会では、自分の経験を刷新するための学習方法を学び、応用することが重要になってくると指摘している。

次に、②「同一化モデルとしての心理発達の役割」は、主に10代の生徒に対して、一緒に学習を進める中で高校を卒業した後の姿についてイメージを持たせたり、進学のための書類作成に関する相談を受けたり、希望進路に関するアドバイスをすることなどが含まれる。若年の生徒にとっては、教員よりも生徒の目線に近い学習チューターとの「ななめの関係」(笠原, 1977)も一定の意味を持っている。ただし、学習チューター室の利用者の年齢層が高いことから、チューターがこうした役割を担う場面は少なかった。

最後にA高校における学習支援場面では、③「カウンセラーとしての心理療法的役割」が全面に出ることはなかったが、これは意図的に設定されたことでもある。A高校における学習チューター活動は、2005年度に心理臨床を学ぶ大学院生による相談活動としてスタートしたが、院生の負担が大きいとの理由から、学習に焦点を絞った活動として実施されるようになったという経緯がある。篠原・佐野(2002)は、大学生・大学院生等による、精神疾患を抱える生徒に対する「治療的家庭教師」としての支援のあり方について検討している。そこで篠原らは、「(対応する学生と)生徒との年齢が近いこと、転移の対象になりやすく、性愛的な妄想の対象となったり、過度に依存されたりする等の問題」(p.162)が存在することを指摘している。実際、商業高校における高校生に対する学習支援に携わった学生が、生徒から個人的な悩みを相談されたり、メールや電話が頻繁にくるようになり、対応に悩んだという事例の報告もある(酒井, 2007)。通信制高校にも、心理的な支援を必要とする生徒は多いため、同様のトラブルが起こるリスクが高い。そのため、活動を学習支援に絞ってからも、A高校の学習チューター活動においては、生徒と過度に距離を詰め過ぎ、依存させる関わり方にならないよう、チューター室の外では活動を行わない、連絡先の交換はしないというルールの遵守が徹底されている。また、活動時間についても、終了のタイミングで、チューター活動担当教員が振り返りのために来室し、生徒に帰宅を促すなど、時間と場所の枠組みを明確にすることで、チューターと生徒の間に

線引きをしている。ただし、学習チューター室を訪れる生徒は、学習に対して強い苦手意識や劣等感を抱いている場合も少なくない。これは、通信制高校に在籍している生徒の多くにあてはまることでもある。そのため、生徒にとっては、時として学力以上に自己肯定感の獲得に向けた配慮が重要となることもある。また、対人緊張が強く、人とコミュニケーションを取ることが難しい生徒の場合、与えられた課題に取り組むことよりも、生徒が達成可能な課題を探し、それに一緒に取り組むことで、達成感を味あわせることを重視する場合もある。学習内容に関する問いかけ等をきっかけにして、生徒とのコミュニケーションが始まる事も多い。

コミュニケーションを重視しながらも、依存させる関わり方にならないよう、A高校のチューター活動においては、場所と時間に関するルールが徹底されている。

ここまで見てきたように、学習支援活動は、一見明確な目的と方法をもった活動のようにも見えるが、実際には、生徒個々の状況に合わせ、多様な目的と配慮のもとに運用されている。

Ⅲ. 調査方法

1. 参与観察

A高校において、面接指導が行われる毎週日曜日に実施されている「学習チューター活動」に筆頭者が参加し、観察を行った。本活動は、2010年10月より2010年12月までは、筆頭者を含む大学院生2人、2011年5月より2013年12月現在までは、筆頭者および全学の教職課程の学部生約10人によって実施された。2011年度以降は、毎週5人程度の学習チューターが活動を行った。活動内容は、毎回担当したチューターが生徒毎に記録用紙に記入したほか、筆頭者が、活動日毎にフィールドノートに記録した。

2. ボランティア学生に対する聞き取り調査

A高校における学習支援活動に参加しているボランティア学生に対し、活動の前後に、半構造化面接による個別の聞き取り調査を実施した。実施時期は、2012年1月～4月（事後）、2012年5月～6月（事前）、2013年3月（事後）、2013年5月～6月（事前）であった。質問項目は、①事前調査、活動への参加理由、学習支援（指導）経験の有無、自身の学習に関する経験等、②事後調査、活動を通して得たもの、活動中に工夫したことや困ったことなどであった。聞き取った内容は、許可を得たうえで録音し、逐語録を作成した。

Ⅳ. 調査結果

Ⅲで述べた調査によって得られたデータから、チューターにとっての本活動の意義や困難、工夫に関する内容を抽出し、教えることの難しさ、活動中の生徒に対する配慮、チューター同士の情報共有に分類した。結果を以下に示す。

1. 教えることの難しさ

1) 「学習方法」が分からない生徒

A高校における学習チューター活動は、生徒が持参したレポート課題等に取り組むという明確な内容を持っていた。そのため、生徒に教えようとする中で、チューターが感じていた困難の多くは、生徒が何を理解できていないのかが理解できない、どのように説明すれば良いのかが分からないといった、学習指導の方法に関するものであった。チューターBは、既にアルバイトで同様の困難を感じ、ボランティア活動に参加したという。Bの場合、自身は勉強が得意で、学習の方法も、人に教わるよりも自分で「考案」するタイプだったという。しかし、学習塾でのアルバイトを始めてみると、生徒に「ここ覚えてきてね」と課題を出しても通用せず、単語を暗記させる場合、暗記のし方から教えなくてはならなかった。Bはこうしたギャップに驚き、苦勞したという。オリヴェリオ（2005）は、人びとは学ぶ能力が誰もがもっている「一般的な」能力であるという錯覚に陥ることがあるが、「学習方法を学ぶこと」は後天的な能力だとする。Bの驚きは、こうした錯覚の典型的な表れといえるだろう。

2) 理解や納得を求める質問

Cも、自分が分かっていることを教えるのはとても難しいと語った。同様の事を語るチューターは多かったが、難しさの原因は、実際には学習内容を「理解」していたのではなく「暗記」していたことによるというケースも多かった。DとEは共に、自分が暗記していた内容についての素朴な疑問に対して、答えることができなかった経験を回想している。Dは数学のルートを例に挙げ、自分が「覚えるしかない」と考え暗記していた内容を説明する時に困ったという。Eは、英語の三人称単数を例に挙げ、「heにはsがつくのになぜtheyにはつかないのか」といった疑問を投げかけられた時、結局、教科書の例文を見せて、「証拠」を提示する他なかったという。Eは、自分自身が同様の内容を学んだ時には、「覚えなきゃ」という意識で、仕組みを理解することなく暗記していたという。このように、Dはルートについて、Eは英文法についての言及であったものの、どちらも自分自身が疑問に感じることなく暗記していた事柄について質問され、説明ができないという経験をした。ルールの説明はできても、理由を説明することができない内容に関する質問については、対応に苦慮するチューターも多かった。ただし、参与観察を通して、実際には「なぜ」という質問をする生徒の中には、公式の原理や文法の背景を知りたいがっている者だけでなく、単純にルール自体が理解できていない者がいる事も明らかになった。そのためチューターは、質問することに慣れていない生徒の意図を推し量る必要があった。

また、生徒の学習意欲が高くても、内容を全て理解することが困難な場合も少なくない。そのため、数学などは、チューターが手取り足取り計算の過程を教える場合も多い。こうした場合、公式の利用について説明しようとしても、公式の証明の理解が困難で説明の途中で生徒が混乱してしまったり、暗記をすることが困難なために、地道に計算する事を勧めるケースもある。このように、

それぞれの生徒が求める知識の内容および深さや、学習内容の理解に要するスピードを確認しながら、適切な学習方法を選択し、伝えていくことが必要とされた。

3) アセスメントの方法

チューターは、学習支援を始める際、まず、それぞれの生徒が学習内容をどの程度理解しているかを確認する必要があった。Fは、学習塾でのアルバイト経験から英語を例にとり、生徒の学習状況を把握するため、「修飾語とかが何もない状態（の英文）を作れるか」「一般動詞とbe動詞は分けて考えられるか」というように、基本的な内容から順を追って確認すると語った。このようなアセスメントを行っていたFだが、チューター活動中には、「主語がきて動詞が来る」という点についても理解ができていなかった生徒もいたことから、探り探り学習支援を進めていたという。

初めのうちに生徒に質問を投げかけながら学習内容の理解状況を把握した後は、あまり口を出さなかったという声も聞かれた。Cは、チューター活動を通して、自分で言うよりも、生徒に実際問題を解いてもらい、間違えたところを直した方が、勉強している人の身になるのではないかと思うようになったという。このように考えるようになった背景には、生徒が面接指導の進捗についていけず、演習もないために、学習内容を理解できないと語っていたことも影響しているという。

チューター室を利用する生徒は、来室の目的が明確で、純粋に学習上の困難を抱えている場合がほとんどであった。そのため、学習チューターは、まず、各自の学習内容修得状況を測るため、基本から丁寧にアセスメントをしていた。その上で、学習内容に関する解説だけでなく、教科書、学習書、辞書などの調べ方、自分の考えのまとめ方等を教えるという関わりを行っていた。その際一方的に教えるのではなく、練習を兼ね、生徒自身に答えを出させるといった工夫が見られた。

2. 生徒に対する配慮

1) 各自の理解に合わせる

チューター室を利用する生徒の中には、分数や小数の計算が苦手で、なかなか習得できないという生徒もいる。そのためチューターは、生徒個々の理解に応じて、練習問題などを適宜用意しながら学習を進める。例えば、生徒が数学Ⅰの二次関数のレポート課題に取り組む中で、途中式の計算で躓いた場合、それぞれの生徒が持つ課題に合わせた分数や小数の練習問題をその場で何問か提示することがあった。しかし藤田・加藤（2012）は、学習内容が理解できないという「負の学習経験」の結果による学習性無力感を抱く高校生に対して提示する課題は、「生徒が高校生として学ぶに値する内容であること」が重要だとする。このように、学年に不相応な課題を出されることで、生徒が劣等感を抱き、学習に対して気持ちが向かなくなるとの指摘がある。

学習内容の理解が困難であるという点では、A高校のチューター室利用者もこの事例と同様であるが、チューター室においては、提示された問題の内容やレベルの低さを理由として課題に抵抗を示す者はいなかった。この違いの背景には、チューター室を訪れる生徒が、学習に

対しては劣等感を持っていても、基本的に心理状態が安定している場合が多い点、学習内容を理解できるようになること自体に価値を見出していた点、チューターとの1対1の関わりが中心で、他の生徒と比較されることがない点などが影響したものと考えられる。ただし、小学校や中学校のテキストを利用すれば、そのことが生徒の自尊心を傷つける可能性は考えられる。

2) 劣等感や遠慮への配慮

チューターからは、活動中、生徒の劣等感を刺激しないよう気を付けていたという声も聞かれた。Cは、自身が大学で理解できない授業があってもなかなか人に「教えて」と言えずに苦しんでいることから、チューター室を利用する生徒と自分を比較して、分からない所を素直に教えてもらいに行けることがすごいと感じていたという。また、自分と同様の状態にある生徒もいるのではないかと語った。こうした経験から、Cは、いかに生徒の自尊心を傷つけずにかかわるかということに心を砕いたという。

Dは、自らも不登校を経験し、そうした経験を持つ生徒と関わる機会を求めて活動に参加した。D自身、不登校であった当時の学習の遅れから、数学に対して苦手意識を持っているとも語っている。こうした経験もあり、Dの言葉かけには随所に生徒に対する配慮があった。Dは、気を付けていたこととして、なるべく真顔にならないこと、質問された時、すぐ解説に入らず、「そうだよね、分からないよね」と共感を示すことを挙げた。共感を示すことで、生徒が馬鹿にされているような感覚を持たず、落ち着くのではないかと考えたという。Eもまた、分からない所は人それぞれだから「当たり前でしょ?」という雰囲気を出してはいけないと意識していたという。質問に対して教員が馬鹿にした様子でのけぞりながら教えるのと共感的に前に乗り出して教えるのとでは、教わる側の気持ちが違うというように、振る舞いから感じ取られる「雰囲気」も含めて気を付けていたという。

また、Dは、来室者が多い時、同じ内容であれば二人同時に教えられるかと考えたものの、二人同時に対応することによって、生徒が質問をしづらくなるのではないかと懸念を持っていたという。生徒の中には、チューターに話しかけることに対して緊張が強かったり、遠慮があったりして、なかなか自分から質問できない者もいる。そのためチューターは、質問が無くても常に生徒の様子を観察し、解答の過程を確認したり、手が止まっている時には積極的に声を掛けるなどの対応をしていた。

3) 成人への配慮

学習チューター室を利用するのは若年の生徒ばかりではない。むしろ成人の生徒の利用が多いことが、A高校の学習チューター室の特徴の一つといえるだろう。成人の生徒とチューターの関係は、若年の生徒との「ななめの関係」とは異なっている。20代の生徒にとっては、チューターは自分より若干年下になるが、チューター室を利用する生徒には、年下のチューターに教わることを躊躇する様子はなかった。自身が10代後半だった頃の経験などを笑って話す様子もあり、当時の経験のある程度自分の中で消化した上で、学習の必要性を実感して、真

撃に学習に向き合おうとしている姿が見て取れた。また、30代後半を超えると、チューターが自分の子どもや孫の年齢に近いと語る生徒も多かった。

しかしチューターの側は、自分より年齢が高い生徒に対する学習支援という特殊な状況で、対応に気を遣っていた。Gは、高校生のイメージに反し、自分より年上の生徒が多かったことから、初めのうちは接し方に戸惑ったという。Fも、年上の生徒が多かったため、生徒の気分を害さない事を一番に考え、言葉遣いに気をつけたり、理解できて当然というようなことを言わないように、探り探りしゃべった。また、年齢が分からない生徒には特に気を遣ったという。Eは親の様子から、4、50代の人には特に、質問に対して「え、ここわかんないの?」という反応をされた時に嫌だと感じるのではないかと思ひ、理解できて当たり前という雰囲気を出さないように配慮をしていたという。

4) 生徒の状況に対する共感的理解

学習チューター活動では、チューターは、生徒に解答を教えるのではなく、答えを導き出す方法を教えるよう求められる。しかし、課題の提出期限が迫るにしたがって、答えを教えてほしいと言う生徒が来室するようになる。Cは、自分が大学で授業の内容が理解できないという事態に直面し、理解よりも単位の修得を優先してしまうという生徒と「同じ境遇にさらされている」として、とにかく答えを教えてほしいという生徒に対する共感を示した。そのため、答えを教えて欲しいと言われた時にも、すぐに自分で考えるよう促すのは冷たいのではないかとも思ったという。

その一方で、Cは、単位修得に追われる中で、「分からない」ということが辛いと感じ、もう少し詳しく理解できれば面白い内容を十分に学べない状況が、自分にとってチューター室を利用する生徒にとっても「もったいない」とも感じていた。高校においても当然、生徒にとって、単位修得のための課題提出は重要である。そのためチューターは、課題の提出期限が近付くと、生徒が学習内容を理解することと、課題を速やかに完成させることとの間で揺れることになる。

3. 情報共有について

前節までに、チューターが、それぞれに様々な工夫や配慮をしていることが明らかとなった。一方活動上の問題については、活動終了後のチューターに対する聞き取り調査において言及されることは少なかった。しかし、活動中には、雑談をすることはあっても、指導法や生徒に関する情報交換が行われることは稀だった。そのため、チューター個々の工夫が、他のチューターに伝えられる機会がなく、ノウハウが共有されなかった。Eは、チューター同士の生徒に関する情報共有は特になかったが、活動を進める中で把握が可能だったという。このことから、Eは情報共有の必要性を感じていなかったように見えるが、Eは同時に、あると良かった工夫として、生徒が分からなかった部分について詳しく書いておけば、別のチューターが担当する際にも教えやすいのではないかと、記録による情報共有を提案している。

V. まとめ

1. ボランティア活動の学生に対する効果

最後に、IVの調査結果を踏まえ、通信制A高校における学習チューター活動の意義と課題について検討する。

1) 学習支援における工夫と配慮

学習チューター活動中には、生徒一人一人の、学習内容習得状況や理解のスピード・癖などを把握することが最大のポイントとなり、この点に難しさを感じたというチューターが多かった。

チューターは、これまでの自身の経験も活かしながら、学習内容習得状況が異なる生徒一人一人に対し、「分かって当たり前」という先入観を持たず、分からなさへの共感を示す事によって、生徒の自尊心を傷つけず、劣等感を低減させる工夫をしていた。進学校を経て大学に進学し、教職を目指す学生の中には、勉強が分からないという状況をほとんど経験したことがないという者もある。そのため、学習方法を手取り足取り教える必要がある子ども（生徒）に対する個別的な指導を学生時代に経験しておくことには、大きな意義があると考えられる。

また、チューター室の利用者には年齢の高い生徒も多かったことから、チューターからは、言葉遣い等も含めて気を遣ったという声が多く聞かれた。しかし、年齢の高い生徒の、教わった内容を素直に聞いて、必死に習得しようとする姿や、学習が終わった後のお礼の言葉などが、チューターにとってのやりがいになるとともに、チューターが本活動の重要性を意識することにもつながっている。

2) 学習を中心とした支援の特徴

IV調査結果で述べた通り、学習塾でのアルバイトを経験しているチューターFは、その経験を活かして活動を行っていた。しかし、学習塾における、小中学生等に対する学習指導場面では、勉強をいやがる子どもをいかに学習に向かわせるかということ自体が指導の第一段階として大きなハードルとなり、学習指導について深く考えたり工夫する余裕が持てない場合もあった。学習塾でのアルバイトを経験したCは、塾に通ってくる学習に気持ちに向いていない子どもに学習させることに対し、抵抗感を持っていたという。

一方、学習チューター室は、開室日に希望する生徒が自分の都合に合わせて自由に来室するというスタイルを採っている。そのため、来室するのは、学習内容を理解することが困難でも、学習意欲は高い、学習に対して積極的な生徒が多かった。そのためチューターは、生徒の意欲を高めるという段階を経ることなく、学習支援に取り組むこととなった。

意欲が高く、対人緊張が低い生徒は、心理的にも安定しており、チューターが上手く教えることができなくても根気強く説明を聞き、また、繰り返し来室する機会が多かった。そのためチューター室は、チューターにとっても失敗を恐れず経験を積み重ねることができる場であったと考えられる。つまり学習チューター活動は、学習上の困難を抱える生徒に対する学習指導の方法を学ぶことができる貴重な場であった。結果として「勉強を分かりやすく教えることのむずかしさ」を感じたチュー

ターが多かったことは、本活動の特徴ということができ
るだろう。

A高校の在籍生徒の年齢は多様である。そのため
チューターは、自分よりも年上の「生徒」に対する支援
を行う機会も多かった。こうした場面に戸惑いを覚えた
というチューターは多いものの、こうした生徒の学習意
欲の高さには、驚いた、刺激を受けたという声も多く聞
かれた。ここから、チューター活動は、学生の学習意欲
向上にも影響していたものと考えられる。

3) 生徒の声を通して実態を知ることができる

A高校の学習チューター活動は、教員がいない場で行
われている。そのため生徒は、チューターと打ち解けた
雰囲気できつぱらんに話をしている。教員と生徒の間
には、「評価する者」「される者」という上下関係があり、
生徒にとっては、気軽に話をできる相手ではない場合も
多い。チューターの多くは、大学卒業と同時に、教員と
して、生徒の指導を行う立場に立つ。彼らにとって学習
チューター活動は、学生のうちに、自分が高校生であつ
た当時とは出会うことのなかった、学習で苦勞する生徒
と直接関わることのできる貴重な機会であると考えられ
る。また、時には、自分の家庭の状況について語る生徒
もいる。過去の高校中退経験、両親の離婚や経済的事情
等の家庭的背景について直接話を聞き、知っておくこ
とは、将来教員として多様な背景を持つ生徒に対して配慮
するためにも、重要であると考えられる。

なお、学習チューター室が学生（および院生）のみに
よって運営できている背景には、活動内容を学習支援に
絞り、自ら来室する学習意欲の高い生徒を中心に受け入
れているため、対人関係上のトラブルが発生しづらいと
いう特徴がある。

4) 自分の適性について考える機会になる

森下ら（2010）は、学校現場におけるボランティア活
動が、「自らの実践的指導力が実践の場で通用するの
か否か」という点について省察する機会になるとする。通
信制A高校でも同様に、学習チューター活動を通して、
チューターは、生徒と直接かかわり、様子を知ると同時
に、教えることの難しさに直面し、自分の適性について
も改めて考え直すことになる。チューターはA高校で、
母校での教育実習ではほとんど出会うことがないが、
教員になれば出会うであろう、学習等に関しての様な困
難を抱えた生徒と近い距離で関わる。この経験を通して、
自らの知っている学校と、今後赴任する学校とのギャッ
プによるトラブルが低減できるのではないかと考えられ
る。

2. ボランティア活動の課題

1) 限定された対象者と活動内容

活動内容を学習支援に絞り、学習意欲が高い生徒に対
応しているという本活動の特徴は、学生のみでの活動を
可能とし、また学習支援自体の難しさを知る機会となる
という点で意義があった。しかし、積極的にチューター
室を利用するに至らない、学習意欲を持ちづらい生徒と
関わる機会が少ないという点は、本活動の重要な課題で
ある。

また、生徒の多くは、面接指導の合間の限られた時間

の中でチューター室を利用していたことから、時間的な
余裕がなかった。そのためチューターからは、生徒とも
う少し話しをし、様子を知りたかったという声も聞かれ
た。活動が学習チューター室内に限定されていることか
ら、他の教室で行われている学習活動の様子を知る機会
が少なかった点も課題である。

2) 情報共有と振り返りの重要性

それぞれのチューターは、これまでの自身の経験を活
かし、様々な工夫や配慮をしながら活動に携わっていた
が、活動中には、指導法や生徒に関する情報交換が行わ
れることは稀だった。また、活動終了後の、チューター
に対する聞き取り調査で、活動上の問題が指摘されるこ
とも少なかった。チューター室で生徒の情報共有が行わ
れなかった背景には、学習している生徒がいる場で他の
生徒の情報について話し合うべきではないという配慮も
あった。しかし、2013年度前期を例にとると、チュー
ター同士が顔を合わせる場合は、チューター活動中及び、
年に数回の懇親会のみであった。教育学部の学生は、友
人同士で活動に参加している場合もあるが、他学部の学
生の場合、他のチューターとつながりがあることは稀で
ある。

今後、チューター同士が生徒の様子や活動における工
夫、配慮についての情報を積極的に交換し合うとともに、
活動上の問題を意識していくためには、これ等の内容に
ついて情報共有をできる場の設定が必要だと考えられる。
松尾・杉村（2010）は、小学校で学習支援ボランティア
を行う学生に対して、事後の振り返りレポートの作成と
フィードバックを新たに加えたカンファレンスを実施し、
統制群との比較を行っている。その結果、振り返りレ
ポートとフィードバックあり群は、自らの考えを話す事
で、活動を意識化したり、活動内容を批判的に捉え直す
ことの必要性を認識するようになったという。松尾らは、
こうした学びを得た学生が、その反省に基づいて次の学
習支援活動の計画を修正するとともに、実際の学習支援
の過程においても自分と子どもの関わりを意識化すると
いう循環が生まれていた可能性を示唆している。

A高校におけるチューター活動についても、今後、生
徒の状況や、各チューターの指導上の工夫や配慮につい
て、チューターが情報共有およびフィードバックを得ら
れる場の設定について検討する必要がある。こうした場
を設けることは、個々のチューターが行っている工夫等
の共有、自分の活動の在り方の内省の他、チューター同
士のコミュニケーションの円滑化にも資するものである
と考えられる。

3. 調査研究上の課題

本稿では、学習ボランティア活動の学生にとっての意
義について検討を行った。本活動の生徒にとっての意義
と効果の検討については、「効果」の捉え方を含め今後
の課題としたい。

注

1) 近年、私立の通信制高校は、10代（高校生年齢）の
生徒の受け入れに特化し、登校日数を増やしたり、個別

の学習指導を充実させるなど、手厚い支援を行う傾向にある。

引用文献

- Alberto, Oliverio. 1999, *L'arte di imparare*, RCS Libri S. p.A.(=アルベルト, 川本英明訳 (2005)『メタ認知的アプローチによる学ぶ技術』創元社.)
- 大塚類 (2011)「特別な教育的ニーズのある子どもへの学習支援について ―児童養護施設の学習ボランティアの語りを通して―」『千葉大学教育学部研究紀要』第59巻, 267-273頁
- 緒方明・川口久雄・小松哉子 (1994)「不登校への家庭教師による治療的接近」『熊本大学教育学部紀要人文科学』第43巻, 169-176頁
- 笠原嘉 (1977)『青年期―精神病理学から』中央公論社
- 酒井朗編 (2007)『進学支援の教育臨床社会学 ―商業高校におけるアクションリサーチ』勁草書房
- 篠原恵美・佐野秀樹 (2002)「精神疾患を抱える生徒に対する治療的家庭教師, ―その援助関係と実践的視点―」『東京学芸大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第26集, 153-163頁
- 藤田毅・加藤誠之 (2012)「大学生による私立高等学校での学習支援活動に見る高校生学びと学校改革への視点」『人間関係学研究』第18巻第1号, 33-39頁
- 松尾剛・杉村智子 (2010)「学習支援ボランティアにおける学生の学びを促すカンファレンス構造の検討 ―事後の振り返りとフィードバックに注目して」『教育実践研究』第18号, 119-126頁
- 森下覚・久間清喜・麻生良太・衛藤裕司・藤田敦・竹中真希子・大岩幸太郎 (2010)「学校支援ボランティアにおける省察的実践の支援体制と実習生の学習の関連性について―大分大学教育福祉科学部『まなびんぐサポート』事業を通して―」『大分大学教育福祉科学部研究紀要』第32巻第2号, 261-275頁
- 文部省 (1948)『中等学校通信教育指導要領 (試案)』国立教育政策研究所ウェブサイト<http://www.nier.go.jp/guideline/s22jex/> (2013. 9. 28最終アクセス)